

何で男の娘が
好きなのかわかんない。





序

え？ 先生のどこが好きになったかって。

それを聞いてどうするつもりなの？

安心したいっていうなら、無駄なことだと思うけど。

だって人が人を好きになる理由って、他人が理解できるものとは限らないでしょ？

つまり、私が先生を好きになった理由を話しても、先生は納得できないってこと。

それに大抵そういった理由ってあとづけだしね。聞いたって意味ないよ。

人は好きになったら後から好きになった理由を見つけて、嫌いになったら後から嫌いになった理由を見つけるものだってこと。

じゃあ、せめて好きになった切っ掛けを教えてほしい？

うーん、どうだったかな……。

一目惚れ？ あははっ、ないない。

初めて見た時は、恋人としてはまったく眼中になかったかな。

嫌ってるように見えたなら、それは本当にそういうことだと思うよ。

私ツンデレじゃないしね。

酷いって、仕方ないじゃない。

だっていきなり先生に対して恋人としての『好き』を抱けるわけないでしょ？

どんなに可愛く見えても、先生と同じ、

——オトコのコ——

なんだから。

第一章

古い価値観が生きている場所は、ある種の排他性が存在する。

そういう理由なのか、都内にある伝統あるお嬢様校、私立那古峰《なこみね》女学院にも俺を拒絶するような空気がひしひしと感じられた。

だが、気後れしている場合じゃない。今日からこの学院で教鞭を取らなければいけないのだ。

1年C組の教壇に立った俺は、三十人弱の視線を受け止めながら、毅然とした態度を装いつつ口を開いた。

「このクラスを受け持つことになった青木清彦《あおき きよひこ》です。半年間ですがよろしくお願いします」

一年ではなく半年——夏休み明けの今日から、俺はこのクラスの担任となった。

産休を取った先生の代わりに二学期から臨時採用された……有り体に言えば、アルバイト教員だ。

とはいえ正式な教員でもアルバイトでも、生徒にとっては同じ先生なのだ。

気を引き締めて、まずは名前と顔を一致させるために、生徒たちに自己紹介してもらうことにした。





「じゃあ、右端の席の人からお願いします」

「はい」

さすがはお嬢様学校、ウケを狙う者もおらず淡々と進んでいく。

「城ヶ崎悠木 ㊤じようがさき ゆうき㊤と申します。よろしくお願いします」

「……」

八番目に名乗った――苗字と名前で韻を踏んだ少女を見て、俺は目を奪われた。

際立った美人でありながらも、愛らしさが残る、この年頃にしかない魅力を強烈に発散していた。

まず目を惹くのが、腰まで伸びた長い髪だ。サラサラで、キューティクルが輝いている。

顔の輪郭は、頬に少女らしい柔らかな膨らみを保ちつつ、アゴ先はシヤープで無駄な肉がない。

大きな目は、やや吊り上がっているが、薄く艶やかな唇がかすかに微笑を湛えていることで、陰は感じられず、凜とした印象を与えるチャームポイントになっていた。

体型は年齢にしては、小柄でやや肉感に欠ける体つきだが、それはそれでお人形のような魅力があつて、胸の中で抱きすくめてみたくなる衝動に駆られるほどだ。

ただ、目を奪われたのは、彼女が卓越した美少女だったからだけじゃない。

片想いした初恋の相手と似ていたからだ。

「先生、どうされましたか？」

城ヶ崎が、怪訝な顔でこちらを見ている。

女の子はこちらが思っている以上に、男の意図を察することができるものだ。

「……城ヶ崎か、よろしく。じゃあ次」

なんとか平静を装ったが、その時から彼女が気になって仕方なくなっていた……。



歴史の教師として初日を終えた俺は、職員室で生徒たちの資料に目を通してみた。



当然、赴任前に暗記するほど読んだが、実際に当人たちと会ってみると印象が違う。

机上の空論とはよく言ったもので、現実を見ずに資料だけで判断すると、やはり間違いが起こるということなのだろう。

そんな中で、やはり気になるのは城ヶ崎悠木だった。

彼女の成績を改めて見ると、赤点ギリギリの低空飛行で、夏休みは随分と補習を受けたようだ。

あの子とは違って、あまり頭はよくないんだな……。

俺はあの子——初恋の相手のことを脳裏に浮かべた。

容姿は似ているが、あの子は成績優秀で優等生だった。

当たり前だが、二人は全然違う。

俺は頭を振って、城ヶ崎と初恋の子を重ねてしまう自分を縛めた。

生徒一人を必要以上に意識していたら、教師を続けていくことなんてできない。

自分にそう言い聞かせて、授業が終わったら挨拶に来るように言われていた学院長室に向かった。

「失礼します」

職員室の横にある学院長室に入ると、プレジデントチェアに座った、初老の紳士然とした人物がこちらを向いた。

学院長は俺の祖父の兄——大叔父だった。

この学院は斯波≡しば≡家によって運営されており、大叔父はその斯波本家の当主でもある。

母方の繋がりなので苗字は違うが、俺もその斯波家の末席に位置していた。

大学卒業後、就職した会社が二年で倒産して一年もの間職を探していた俺に、憐れと思ったのか声をかけてくれたのだ。

とはいえ大叔父とはそれほど親しい間柄でもなく、この学院に来る前は、従弟の結婚式と祖父の葬式の二回見ただけだったが……。

「どうだね。初日を終えた感想は」

「はい、問題ありません」

親戚だからといって、馴れ馴れしくするのは違うだろう。襟を正してそう答える。

「そうか、君には期待しているよ。半年間無事に勤めた暁には、正式採用も考えているから」

「よろしく願います」

無職の辛さは身に染みている。それはありがたい申し出だった。



深々とお辞儀をして頭を上げると、大叔父は急にわざとらしい笑顔を見せた。

「ところで清彦君、学院は寄付によって成り立っているのは知っておるね？」

若年者に言い含めるような口調で言う。

「まあ、そうですね……」

意図がよくわからなかったが、とりあえず相槌を打った。

「寄付の多い者の頼みは聞かねばならない。それくらいの道理は理解できるね？」

即答するのを躊躇った。笑顔の大叔父の瞳の奥に、仄暗いものを感じたからだ。

言葉の裏を取るに、高額寄付者に何か便宜を図るってことか？

それは倫理に反するレベルってことだろうか……。

この学院の職員は縁故で採用されている者が多い。それは機密保持のためと親戚筋から噂は聞いていた。

俺にも何か後ろ暗いことをさせるつもりだろうか？

これまでに不正は行わず、それなりに筋を通した生き方をしてきたつもりだ。

だが、歴史を教えている俺は知っている。

人間の歴史には、圧倒的に理不尽なことの方が多く、筋が通るということは、逆に希有なのだ……。

「どうだね？」

「そうですね。そう思います」

正義感を振り回しても仕方ない。追従すると、大叔父は俺の答えに満足したのか、笑顔のまま頷いた。

「よろしい、これは君を見込んでの話なのだが、個人的に面倒を見て欲しい生徒がいるのだよ」

個人的に面倒を見て欲しい……つまり、最優先しろということか？

「はい、問題ありません」

素直に従うことにした。どの程度の最優先かわからなかったが、拒絶することもできない。職を失うわけにはいかなかったからだ。

大叔父は俺の返答を受けると、その生徒を呼び出すためか、携帯電話を取った。

連絡した後、しばらくしてドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」



「……あ」

初恋の相手にそっくりな美少女が現れて、俺は小さく声を漏らしてしまった。

一日でもう一人そんな子に会うわけもなく、先程まで悶々と考えていた城ヶ崎悠木本人だ。

つまり彼女の親が高額寄付者ってことか？

「彼を紹介しよう。城ヶ崎悠木君だ」

「知ってますが……」

どういふことだ？ 俺が担任であることを知らないわけでもあるまいに……。

「知っていた？ 悠木君が、男だと見抜いていたのか？」

「え？」

「彼と言ったろう？」

彼って……大叔父は城ヶ崎が『男』だと言ってるのか？

城ヶ崎はどこからどう見ても女の子だ。しかも、相当レベルが高い。

ただ、確かに胸の辺りが寂しくて女らしくないとも言えるが……。

当の城ヶ崎は微笑を湛えたまま何も言わない。

「何の冗談ですか？」

大叔父に向き直り問い返した。

「冗談ではないよ。旧家の城ヶ崎家は、代々女性が家督を継ぐことが決まっていたね。一人息子の悠木君は女性として育てられた。まあ、家の事情というやつだな」

そんなことが今時あるのだろうか……。

からかわれているなら、上手く立ち回らなければ、今後足下を見られかねない。

「その話が事実なら……女子校に男を入学させていることになりますが……」

疑問は多々あったが、はつきりわかる矛盾を突いてみた。

「悠木君は戸籍上も女性だから問題はないよ」

「こ、戸籍も？ 男で女に……それって……」

混乱しかけて、裏の意図や真実について考えるのを放棄した。

「……わかりました。それで自分はどうのようにすればいいんです？」

上手く立ち回れないなら、愚直に大叔父の意向に従うしかない。

「そんなに気負う必要はない。簡単なことだよ」

「簡単……ですか？」



「ああ、体育は休んでいるが、これから体育際などがあるだろう？ 君には悠木君が男だとバレないように気をつけてもらいたいのだ」

「そのくらいなら……」

「もう一つ、城ヶ崎家から彼のことをくれぐれもと頼まれていてな……」

「……はい」

「家庭教師をつけてやりたいのだが、事情を知らない者を必要以上に近づけるわけにもいかない」

「当人がいるからあえて言わないが、城ヶ崎の成績が振るわないことを気にしているってことみたいだな。」

「清彦君、君が悠木君の勉強を見てやってくれないか？」

「ええと……家庭教師をしろ、と？」

「そういうことだ」

俺は、改めて城ヶ崎を見た。

「よろしくお願いします」

城ヶ崎はこちらを見ていて、視線が合った途端、ぺこりとお辞儀をした。

彼？ 彼女？ にしても、俺が家庭教師をすることに異論はないようだ。

つまり、俺がすることはクラスで男だとバレないように配慮することと家庭教師をすること、この二点ということか……。

「では、しっかり勤めてくれることを期待するよ」

大叔父に念を押されてしまった。もう拒絶することはできないみたいだ。

まあ、法に触れるようなことをさせられるわけでもないので、構わないが……。

ただ、城ヶ崎は、どう見ても男には見えなかった……。



女学院に赴任してから初めての土曜日、俺は手渡された住所に向かっていた。

その場所にあったのは、俺の住んでるアパートとは雲泥の差がある十数階建ての高級マンションだった。

実家から離れて一人暮らしだと聞いている。

城ヶ崎は一人でこんなところに住んでるのか……。

エントランスにある呼び出しで、城ヶ崎に自動ドアを開けてもらって八階にある部屋に向かった。



男だと聞かされて四日経っている。俺は城ヶ崎が男だということを疑っていた。

男が女の格好をしたとしても、声は変えられない。独特の発声になるものだ。

だが、城ヶ崎悠木はまったくそういうところ wasn't なかった。

大叔父から頼まれて、俺をからかっているのだろうか？

だが、そんなことしても何の利益にもならない。からかうこと自体が目的になるような、学生時代の遊びではないのだ……。

ただ、それも今日はつきりするかもしれない。

もし男なら家の中でも女の子の格好をする必要はない。つまり『彼』に出会えるかもしれない。

そんなことを考えながら、音の静かなエレベーターに乗り、城ヶ崎の部屋の前に辿り着いた。

ドアの横にあるチャイムを押す。

「どうぞ、入って」

すぐにドアが開いて、俺はリビングに招き入れられた。

俺が来るからか、城ヶ崎は制服を着ている。学校と同じ姿だ。

部屋は甘ったるい女の子の匂いがしていて、中の装飾も、男であることを証明するものはなかった。

城ヶ崎の部屋に行けば何かわかるかもしれないけど、ここには男だと示すものは何もない……。

「それで、どうするの？」

学院での優等然とした様子とは違って、ざつくばらんな言葉遣いで、ソファーにだらしなく座った。

「お、おい、なんて格好してるんだよ」

「別に学校じゃないからいいでしょ」

言った後、大きな欠伸をしてみせた。

城ヶ崎悠木——男か女か以前に、猫をかぶっていたみたいだ……。

「あ、そうだ。ワンコ先生、まず言っておくけど、私の心は男だからね」

「ワンコ先生って……」

「だって、先生は学院長の犬でしょ？」

悪意は……あるのかもしれないが、こちらを貶めると言うより、事実を指摘しているだけという体だ。

この前の学院長室での遣り取りを見られている以上、反論はできなかった。

「まあ、それはいい。心は男か……どうも俺はその辺が納得できてはいないんだよ。城ヶ崎から説明してくれないか？」

二人きりになったのは初めてだ。俺は抱いていた疑問を直接ぶつけた。城ヶ崎は、隣にあったクッションを抱き締めると（とても愛らしい姿だ）こちらを見上げながら語りはじめた。

「城ヶ崎家が女じゃないと家を継げないことは聞いたよね？」

「ああ、今時そういうことがあるんだな」

「家に歴史がある分、ままならないこともあるんだよ」

まあ、斯波家も色々と古めかしい掟とかあるようなので、わからなくもないが……。

「母さんは私を生んで死んじゃったのね。で、忘れ形見である私を跡継ぎにしたって父さんは思ってた女として育てたの」

「でも、女になりきれなかったってことか？」

「違う違う。教育方針で見かけは女、心は男になったの。女の子を見て勃たないと、子供を残せなくなるでしょ？」

「勃たないって……」

右手に親指と人差し指で輪をつくり、逆の手でその中に指を突っ込んだ。

「あ、あのな、そういう下品なことやめろよ」

「男なんだからいいでしょ。つまり、父さんは母さんの血筋を残したいわけなのよ」

家を継ぐために女の格好をしつつ、子を成すために心は男のまま……。そういうことか。

「納得はできないが……話はわかったよ」

そう感想を伝えると、城ヶ崎は眉根を寄せた。

「納得してもらわないと困るんだけど」

飛び跳ねるようにソファから立ち上がり、こちらに歩み寄ってきた。

「そう言われてもな、こんな現実離れたこと……」

「現実的な問題だよ。私の心は男だから、ハアハアされると気持ち悪いって言ってるの」

ずいとしを乗り出して強弁してきた。

「な、何だよ、ハアハアって？」

「自己紹介した時から、先生、私に色目使ってるでしょ？」

「……っ」

言葉を詰まらせたが、なんとかそれ以上、狼狽えるのを堪えた。

やはり、あの時目を奪われたことに気づいていたか……。

だが、ここはそれを認めるわけにはかない。教師として最低限の威厳を保たないと、ものを教えるどころではなくなってしまう。



「別に城ヶ崎に色目を使ったワケじゃないよ。初恋した相手に、お前が似ててびっくりしたただけだ」

嘘はついていない。正直にそう伝えると、城ヶ崎は少しびっくりしたような顔をした。

「へえ、似てるんだ。で、その子とはいい仲になれたの？」

「……いやまったくだな」

恥ずかしいが、話に真実味を持たせるためにも正直に話す。

「未練があつたわけね」

「まあ、そりゃな……」

そう答えた俺に、城ヶ崎は急にジトとした目で見つめてきた。

「あのさ、未練たらたらで初恋の子と似てる私を見たってことは……それってどう考えても色目でしょ」

「あー……」

確かにそうだ。……って、納得してどうする。

「そうじゃなくて……いや、その時はそうだととしても、今の俺は一人の生徒として城ヶ崎を見てるよ」

「ふん……」

全然納得していない返事をする。

「とにかく、馬鹿なこと言つてないで勉強をするぞ」

無理矢理会話を終わらせて、城ヶ崎を促した。

「場所はここでもいいのか？」

「あ、うん」

「じゃあ、まずは学力を測るために小テストするから、用意してくれ」

「記憶っていうのが、あまり得意じゃないんだよね……」

「できるところだけでいいから」

「……仕方ないな」

リビングのテーブルを勉強机にした城ヶ崎は、女の子座りの崩れた姿勢で答案用紙に向かっている。

本当に学校と様子が違うな……

だが、そんなずぼらな姿も可愛らしくて……初恋の相手にそっくりな城ヶ崎にどうしても目を奪われてしまう。

「先生……何見てるの？」

城ヶ崎の左側に座った俺の方を向いて、睨んできた。

「あ、いや、……ごほん！」

盛大に咳払いをして誤魔化すが、まったく誤魔化されてくれていない。「ワンコ先生は、そんなに私のことが気になるの？」



不意にニタツと笑い、四つん這いで俺の傍らまで近づいてきた。
どうしたんだ？ さっきまで俺のことを警戒している感じだったのに……。

この年頃の女の子の考えることはわからない。って、城ヶ崎は男だったけ。

「全部嘘で……私が女の子だとしたらどうする？」

耳元で囁くように言った。

「え……」

顔が目の前にある。肌はきめ細かくツヤツヤしていて、もちろん髭の後なんて見えない。

こんな子が男のわけがない。

だったらなんで男なんて……。

もしかして家庭教師をするにあたって、俺が手を出さないように、男と言いつけたのでは？

そんな図式が頭に浮かんだ途端、俺はもう我慢できなくなった。

完全に色目で城ヶ崎を見てしまう。胸が高鳴り、顔がかあつと赤くなる。

「照れちゃって、可愛い」

「や、やめろよ、俺はそういうんじゃないっ」

「そういうんじゃないなら、どういうの？」

「どういうって……」

本当にどういうのなんだ？

俺は女の子と一度だけつき合った経験がある。

女の子の方から言われてつき合って、一週間でつまらないからと振られてしまったのだが……。

嫌な思い出を吹き払うためにも、ちゃんと女の子とつき合ってみたい。

いわゆる『リア充』という経験をしてみたい。

それがこんな初恋の相手と似た子だったら、どれだけ嬉しいか……。

城ヶ崎と俺は生徒と先生……だけど、節度を持ってつき合うならアリなんじゃないか？

「先生……目をつぶって」

城ヶ崎は言いながら尚も顔を寄せてきた。

「な、なんで？」

「ふふっ、目を瞑らないと、損しちゃうよ？」

俺は損をしたくなくて、考えるより先に目を瞑っていた。

この状況……ま、まさかキスカ？

キスクらいなら節度を越えたとはいえないよな。



そう思って待ち構えていたのだが、いつまで経っても唇に何かに触れる気配はない。

ジイイイイイイ……。

不意にジッパーを開く音がした。

「お、おいっ！」

「まだ目を明けちゃ駄目っ」

目を瞑っていても、股間で何かしているのがわかる。

あきらかにズボンのジッパーを下げている。節度を完全に越えた行為をしようとしているのは明らかだ。

「今から直接触ってあげるから」

「そ、そんなこと、しちゃ駄目だ」

「触って欲しいくせに」

戸惑い動けずにいると、熱くなり始めていた股間のモノがやや冷たい城ヶ崎の手に掴まれて、引き出された。

「へえ……結構大きい。ちよつと勃ってる？」

「そ、それは……」

信じられない。俺は今、教え子の家でペニスを露出させている。しかも、触れられて……見られている。

こんなの駄目だ。そう思うのだが、心の中のもう一人の俺が、それ以上のこともしてもらいたがっついていて動けなくなった。

「ふふっ、いい格好になったところで……ハイチーズっ」

カシャ！

「え？」

不意のシャッター音に慌てて目を開く。

目の前には携帯を構えた城ヶ崎の姿があった。

「ふふっ、先生の恥ずかしい写真を捕らせてもらっちゃいました」

城ヶ崎は飄々と言ったのけた。

「しゃ、写真って……何するつもりだ？」

俺は携帯を奪い取ろうと手を伸ばすと、叩かれた。

「動かないで、大人しくしてないと、一括送信しちゃうからね」

携帯を操作して、すぐに送信できる状態にして俺に迫ってきた。

さっきとは別の理由で、再び動けなくなる。

「何でこんなことするんだよ？」

「言ってるのにまた色目使うからに決まってるでしょ！」

「そ、それでこんなことまでするのか？」

全く城ヶ崎の意図がわからない。とにかく、ペニスをしまおうと手を動かすが、制されてしまう。

「動かないでって言うてるでしょ！　これから私の前で発情したら、危険だって体に教え込んであげるんだから！」

城ヶ崎は携帯を構えたまま立ち上がると、足を持ち上げた。

「教え込むって……」

「ふふっ、ワンコ先生を舐けてあげる」

視線が完全に股間を向いている。露出したペニスを踏みつぶす気だ。

「お、落ち着いてくれ、こんなコトしても意味ないぞ」

「そうだね、落ち着かなきゃね。落ち着いて……踏みつぶすっ！」

言い放ち、俺の股間を踏み込んできた。

「ひいっ！」

睾丸ごと竿を踏み込む。体重はかけてないので、それほどの痛みはなかったが、大切な部分を潰される恐怖で全身総毛立つ。

「や、やめてくれよ、そこは敏感なんだ」

「私も男だからわかるよ。わかるからやってるの」

「お、男……さっき女とかなんとか言わなかったか？」

足でペニスを踏まれながら、再びのその問題に戻る。

いつも穿いている黒いストッキングに包まれた脚は艶かしくて、やはり男には見えない。

「あれは写真を撮るための嘘に決まってるでしょ」

城ヶ崎は踵で睾丸を探るように動かして弄んできた。それは痛みより、

気持ちよくなってきた……。

「なんか大きくなってきたんだけど？」

確かに半勃ちしていたペニスが、完全に硬くなっている。

「……城ヶ崎の容姿が好みなんだから仕方ないだろ」

「容姿が好み、ね……色目使うなって言うてるのに全然反省してないね。私の顔を見たら股間が痛くなるくらいにしてあげないと」

足に力を込めてきた。自身の下腹と城ヶ崎の足の裏でペニスが潰される。

「や、やめろ、ホントで痛いってっ」

「だったらおち○ちんを小さくすればいいでしょ？」

「それは……」

「できないの？　先生は踏まれて勃起しちゃう変態ってこと？」

「ち、違うっ！」

違う……と思う。最近、忙しくて又いてなかったことと、足とはいえ城ヶ崎がペニスに触れているという事実が俺を昂ぶらせるのだ。

「違うならここが硬くなってる事実をどう説明するの。ほらっ！」

小学生がやるような、電気あんまの要領で刺激してきた。

「なっ！ ひ、ひあ、く、くすぐったいつ、やめてくれっ！」

想像以上のこそばゆさに、俺は身を振った。

「何この反応、面白いっ」

「や、やめ……ひ、ひあ、こ、こそばゆいって言って……あひっ」

「じゃあ、今度はこういうのはどう？」

踵に体重をかけて、睾丸を潰すようにしてきた。

「ひいつつ！ そ、それは本当にキツイっ！」

「キツイ？ ち○ちん硬くなりっぱなしじゃない！ いいんでしょ？ ほらほらっ」

俺はMではないが、城ヶ崎は天然のSみたいだ。俺の過敏な反応が楽しいようで、顔を上気させてますます行為をエスカレートさせてきた。

「次はこっちっ」

城ヶ崎は止まらない。つま先に力を入れて亀頭を押し潰してきた。

「お、おほうっ！」

睾丸はキツかったが、亀頭を圧迫されるのは気持ちいい。さらには、足指を使ってエラを弄ったりもする。

「なんか、ビクビクしてる」

やばい、このままじゃ射精してしまう。

「もしかして射精する気？ 男の足でされて精液漏らしちゃうんだ」

城ヶ崎は男で教え子で……ああっ！ もうどうでもいい！

「じよ……城ヶ崎が可愛すぎるからいけないんだ！」

今はとにかく、城ヶ崎の足で踏まれながら射精したい。男とか女とかもう関係ない。

「反省ゼロだね。そんな先生には、きつついのお見舞いするから」

再び足を持ち上げると、勢いをつけて俺のペニスを踏み込んだ。

「う、うわっ」

完全に勃起したペニスは天に向かってそそり立ち、城ヶ崎の足を受け止めた。逆に押し返すくらいの硬さだ。

「生意気っ」

俺の腹側に押し倒そうと足に力を込めてくる。その攻撃が最後の一押しになった。

「俺、もうっ！」

我慢できない。城ヶ崎の足の圧力に逆らうように腰を突き上げる。

「出るの？ 恥ずかしげもなく、射精する気？」

「あ、ああ、恥ずかしげもなく……出るっ！」

溜め込んだ精液が、尿道を押し広げてものすごい勢い駆け抜け、鈴口から放出された。
どびゅっ！ どびゅうううっ！



うどんのような白い太い線となった精液が吐き出され、城ヶ崎の黒いストッキングを汚す。

「お、おおおおお……」

生まれて初めての自分の手以外でもたらされた射精は、目の前が真っ白になるほどの快感があった。

城ヶ崎の足を求めて自ら腰を振りながら、最後の一滴まで吐き出す。

「いい顔してるじゃない」

カシャ！

足で踏まれながら精液をまき散らしている姿を、写真に収められてしまった。

「ホント……恥ずかしいね。踏まれて射精なんて」



「し、仕方ないだろ。城ヶ崎があんな激しくするからだ」

「人のせいにするつもり？」

「ああ、城ヶ崎が美少女すぎるせいだ」

「……美少女って、私は男って言ってるでしょ」

「もう、男と女とかどうでもいい……」

射精の快感で頭が沸騰しているからか、そう告げていた。考えてみれば男だろうが女だろうが、城ヶ崎の容姿が俺の好みに変わりはないのだ。城ヶ崎は半分呆れながら再び股間を踏んできた。精液で濡れた足で裏筋を擦る。

「まあいいよ。脅迫の材料はいっぱいになったから」

そう言うと、携帯の液晶画面をこちらに向けた。そこには足で踏まれて幸せそうに射精している俺の姿があった。

これをバラまかれたら人生終わるな……

「配信されたなかったら、これからずーっと私の言うことをなんでもきいてよね」

つまり、言うこと聞かせるために、こんなことしたってことだろうか……

「……奴隷になれってことか？」

そう問い返すと、城ヶ崎は顎に手を添えた。

「それほどじゃなくて……ワンコ先生は……うん、私の犬になってよ」

「犬？」

……奴隷よりはましなのか？

いずれにせよ、足で射精した姿を撮られた以上、俺に選択肢はない。

「あと、今後はこういうのはしないから。ついやっちゃったけど……ねだってきたら本当に潰すから。一個くらいは大丈夫だよ」

片方の睾丸を親指で弄りながら威嚇する。やや、声のトーンが下がり、凄みが増した。

「わ、わかったよ……」

「ふふっ、よろしい。先生、これからは男同士、仲良くやっていこうね」
男同士……

それにしても本当に城ヶ崎は男なのか？

改めて城ヶ崎を見上げると……スカートの股間部分が僅かに膨れているように見えた。

それは皺の具合なのか……どうなんだろう？

体験版はここまでです。

続きは頒布版にてお楽しみいただけます。



連絡先：<http://www.define.gr.jp/enter.html>

サークルブログ：<http://define001.blog89.fc2.com/>

※18歳未満の方は閲覧禁止です。ご注意ください。

本作の無断複写、複製、転載、web上への無断アップロードを禁じます。

この作品はフィクションであり、実在の人物、団体、事件などには一切関係ありません。

#define/ifdef 2011.12